

大自然を司る聖女  
王宮を見捨て**辺境**で  
**楽しく生きていく!**  
Daishizen wo tsukasadoru seijo,  
oukyuu wo misute henkyou de tanoshiku ikiteiku!

2

◆ 著 末松 樹

◆ 絵 中條由良



## 登場人物紹介

### アルバス

王国の第1王子。  
計算高く、狡猾な性格。

### モコシ

山に棲む大地の女神。  
おっとりした性格だが、  
何やら怒っている  
らしい……？

### シルヴァ

辺境に流れ着いた謎の少年。  
身元不明で、自分の名前すら  
憶えていない。

### セマルグル

気高きグリフォン。  
辺境の魔物が慌てて  
逃げ出すほど強い。

### ユーリ

セシリアを一番近くで  
見守る相棒。  
一見普通のリリスだが、  
実は魔法が使える。

### ヴォーロス

ライトニング・ベアと呼ばれる、  
雷魔法を使う熊。  
普段は紳士的だが、  
怒ると怖い。

### セシリア

自然にまつわる魔法を  
使いこなす元聖女。  
追放されたショックで  
前世の記憶を取り戻す。

### スー

火山地帯に棲むスライム。  
好物はモモ。

## プロローグ 辺境の楽しい生活

私、セシリア・ルイスは、土の聖女と呼ばれていて、王宮で土魔法を使い、国の発展に大きく貢献していた。

だけど、私がやることは国内の農作物の収穫量を増やすとか、鉄を産出するとか……とにかく地味。

土や地面に触れていないと使えないという制約もあって、重要な役割ではあるものの、どうしてもその凄さがわかってもらにくいよね。

結果、『聖女と呼ばれているくせに何もしていないのは何事だ！』って言い出した第二王子ルーファス様に、辺境の地ジャトランへ追放されてしまった。

人が住んでいない未開の地を目の当たりにし、大きな海を越えて戻ることも出来ないしショックを受けた私は前世——日本の家電メーカーで開発を行っていたエンジニアであったことを思い出した。

私は、土魔法の一種である、思い描いた鉱物を生み出せる魔法『具現化魔法』が使える。

それと前世の知識を組み合わせることで、日本の家電を再現して快適に過ごせるようになったのよね。

でも、今快適に暮らせているのは、家電のおかげだけじゃないの。ジャトランで出会った索敵魔法が得意なリスのユーリや、雷魔法が得意なライトニング・ベアのヴォーロス。そしてグリフォンのセマルグルさんという喋れるモフモフたちと一緒に暮らしているのも大きい。

喋れるようになったのは私が生み出したリング——どうやら期せずして『知恵の実』になってしまったらしい——を食べたからなんだけど。

そして、一緒には暮らしていないけど、猫の姿をした神様のバステトさんや、その息子のマヘス君もいろいろと助けてくれるしね。

先日も、何故か第二王子が自分で追放したはずの私を連れ戻そうとしてきた。

最初は人を雇って送り込んで来たかと思えば、それが上手くいかないと見るや、次は騎士団の人たちを大勢連れて、王子自らこのジャトランへ乗りこんできたの。

しかも、私の魔法を封じる特殊な腕輪を用意して。

だけど、二人が助けてくれて、なんとか全員無事に王子たちを追い返すことに成功した。

それからは、平和そのもの。

## 第一章 新たな目標

発酵させた生地を円形に伸ばし、表面にケチャップを塗る。

その上にベーコンやピーマン。トマトにコーン、バジルなんかを乗せたら、その上にチーズをたっぷりかけて、いざオーブンへ。

美味しそうな香りが漂ってきて……出来上がりっ！

「みんなー！ お昼ご飯が出来たよー！」

「わあ！ 美味しそー！」

「ふふっ、まだ熱いから、少し待ってね」

ユーリが真っ先にやって来たので、小さく切り分けて小皿に入れてあげる。その間に、ヴォーロスとセマルグルさんも現れた。



「セシリア、ありがとう」

「ふむ。ピザは久しぶりだが……この熱々のチーズはたまらぬな」

「セマルグルさんはチーズが好きだもんね」

切り分けたピザが、あつという間に消えていく。

セマルグルさんに久しぶりだって言われてしまったけど……そういえば、最近は和食ばかりだったものね。

このジャトランへ来て暫くは小麦を使った料理しか作れなくて、やっとお米が作れるようになったから。

思い返してみると……十食くらい連続で和食にしまっていたかも。

昼食を食べ終えたところで、ユーリがあることを聞いてきた。

「ねえねえ、セシリアー。そういえば、もう面白いものは作らないのー？」

「面白いもの……あ、お風呂とか洗濯機とかのことかな？」

「そうそう。セシリアは、ユーリたちが見たこともないものを作るもん」

うーん。私の具現化魔法を使った家電製品を指しているみたいだけど、この間、電車を作つてそれ以降、サボってしまっていた。

大昔に三種の神器と呼ばれていた、テレビ……は流石に、放送局がないから無理で、冷蔵庫はセマルグルさんの氷魔法で実現出来た。洗濯機は作つたし、じゃあ他に何かって言われると……掃除機とか？

けど、そもそも掃除するような家が……そっか！ これだ！

「ユーリ、ありがとう！ よく考えたら、お米や家電で食が充実しているんだから、次は住！ 家をなんとかすべきよね！」

一応、今は私が土魔法で作った石を積み上げた家に住んでいるんだけど……正直無骨で味気ない。「なるほど。獣人族さんたちも、大きな家に住んでいるもんねー」

「別に大きな家でなくても良いのだけど、毎回土魔法で出入り口を塞ぐのもどうかと思うし、今は石の板を立て掛けているだけだから、万が一地震とかがあったら危ないでしょ？ だから、ちゃんとした家に住む方が安心出来るかなって思つて」

私の前世——日本人としての実家はマンションだったし、家電メーカーで働いていた時は二部屋しかない寮生活だった。更に、セシリアとして王宮に住んでいた時は、土の聖女として広い部屋が与えられていたものの、ある意味では寮みたいな感じだし、一戸建てに住んでみたいっていう憧れはあるのよね。

お庭でお花を育ててガーデニングをしたり、小さな畑を作つて家庭菜園をしたり、大き

な犬を飼ってモフモフを堪能してみたり。

……あれ？ おかしいな。何一つ出来ていないはずなのに、どの欲も既に満たされている気がする。

「そうだ！ そろそろ獣人族さんたちと作物を交換する頃合いだから、その時に相談してみようかな」

「じゃあ、善は急げだね！ セシリア、獣人族の村まで電車を使って移動するよね？」

「ええ。そうね。ヴォーロス、お願い出来る？」

「うん。任せて！」

以前は、私たちが暮らしている家の傍の川魚と、獣人族さんの村で作っている乳製品を交換していた。

だけど、私が土魔法で生み出す果物が美味しいので、そっちも交換して欲しいとお願いされ、対応している。

でも、実はこれ……私が日本の記憶を基に生み出した果物なので、あまり外に沢山出したくない。そういうこともあって、少量の果物を定期的に乳製品と交換してもらうことになっている。

「じゃあ、セシリア。出発するよー！」

「ええ、お願い」

「わーい！ 速ーい！」

以前に日本の知識を基に作った電車に乗り込むと、ヴォーロスが雷魔法を使って電車を走らせてくれた。

私の肩に乗るユーリがはしゃいでいる。

レールを敷くのは大変だったけど、この電車のおかげで移動がとても楽になったので、ヴォーロスには感謝しても足りない程だ。

ヴォーロスの雷魔法は、家電の知識と相性が良くて、この電車に限らず様々なものに使わせてもらっているしね。

そう考えているうちに、景色がグングン後ろに流れて行き、あっという間に獣人族の村へ到着した。

「じゃあ、いつものように僕はここで待っているね」

ヴォーロスが言った。

彼が村に入ると、怖がられちゃうのよね。

「ありがとう。いつてきまーす」

「いつてくるねー！」

交換する果物を入れたバスケットを手に、ユーリと一緒に獣人族の村へ。

村の中に入ると、猫耳の生えた小さな女の子、リリイちゃんが見つけて駆け寄ってきた。

「あー！　せーじよのおねーちゃんだー！　リスさんもいるー！」

「リリイちゃん、こんにちば。村長さんは居るかなー？」

「えっとねー……さっき、あっちでみたよー！」

「ありがとう。じゃあ、ちよつと行ってくるね」

「リリイも、いくー！」

そう言つて、リリイちゃんが小さな手で私の手を握ってくる。

モフモフな上に可愛いリリイちゃんとお話ししながら案内してもらい、無事に村長さんのもとへ辿り着いた。

「村長さん、こんにちば」

「おお、これはセシリア様！　いつも、ありがとうございます。こちらに品物を準備しておりますので、どうぞ」

リリイちゃんにお礼を言い、持って来たイチゴをプレゼントすると、凄く美味しそうに食べてくれた。

許されるなら、美味しい果物を獣人族の村人さんたち全員に分けてあげたい。だけど、そんなことをすると別の村——鬼人族さんの村にも同じことをしないといけないし、そうしたらその二つ

の村の間の取引とか、いろんなことに影響が出てしまう。

なので、あくまで獣人族の村が取引出来る量で……と、村長さんからお願ひされているのよね。

「では、今回はそちらのブドウと、バナナでお願い出来ますかな」

「わかりました。では、私はバターとチーズをお願いします」

他にもリンゴや桃など、いろいろと持って来ていたんだけど、これは後でユーリやヴォーロスと一緒に食べようかな。

「……そうだ！　えっと、今日はもう一つ相談がありました」

「ほう。セシリア様がご相談とは……どういった内容でしょうか」

「えっと、実は家を建てようと思つていまして、この村に大工さんが居たら紹介して欲しいんです」

「なるほど……。ただ、残念ながら、この村の家は他の村からやって来た大工に作ってもらったのです」

あ、そうなんだ。

他の村つていうと、鬼人族さんたちの村かな？　それともケンタウロスさんたちの村？　私が知っているのはその二つだけど、他にも村があるのだろうか。

「とはいえ、大工を専門としている者はおりませんが、家に関して何かあった時に対応する者がお

りますので、ご紹介させていただきます」

「はい。是非、お願い致します」

それから、村長さんに連れられて歩いて行くと、三十代くらいの男性を紹介される。

本職の大工さんではないけれど、村で家の屋根や壁が壊れた時とかに修理しているそうで、獣人族さんの中では一番建物に詳しいのだとか。

「セシリア様にはお世話になっておりますし、以前に毒を治療していただいた恩もあります。全身全霊で取り掛かせていただきますので、まずは家を建てる場所を拝見させていただけますか？」

以前私は、村全体が毒に侵されていた時に治療薬を大量に作って助けてあげたことがあるのよね。それをいまだに感謝してくれているみたい。

そう言ってくれるなら、是非もない。

私は頷き、獣人族の男性を電車へと案内する。

「お願い致します。では、こちらへ」

男性は電車に驚いて、ヴォーロスにも終始ビクビクしていたけれど、そのうち慣れてくれる……と思う。

拠点に着いてから、私は目星を付けていた土地に獣人族の男性を連れていった。

「この辺りで考えているんですけど、どうでしょうか」

「なるほど。地面は綺麗に平らになっているので、家を建てるには申し分ないかと」

それから間取りとかは一旦置いて、大まかな広さや要望などを聞かれた。

とりあえず私としては、ヴォーロスやマルグルさんが入れるくらいに広くて、キッチンやお風呂があると嬉しいかな。

男性はメモを取り終わると、小さく頷く。

「わかりました。では、少し準備して……そうですね。明日の午後にまた参りますね」

「ありがとうございます。では、村までお送りしますね」

「い、いえいえ！ 恐れ多いです！ あれくらいでしたら普通に歩ける距離ですので、お気になさらず」

ヴォーロスに頼んで、明日迎えに行く……という話もしたけど、丁重に断られてしまった。

ヴォーロスも大丈夫だって言ってくれたんだけどな。

とはいえ、断られてしまったのを無理に通すのも違うもんね。

一段落したので、昼食の準備をすることにした。

朝食が 피자 だったので、お昼は和食……と思ったけど、昨日は三食とも和食だったし、違う方が



良いかな。

というわけで、少し考えてリゾットを作ることにした。これなら洋食だけど、お米が食べられるし、チーズも使うからね。

生米なまめをオリーブオイルで炒め、事前に沸かしておいたお湯ゆを注ぐ。

リゾットはお米をそのまま食べる時と違って、粘り気を出さない方が良いので、あんまり混ぜないのがコツなんだよね。

本当はお湯ではなくて、ブイヨンとかコンソメとかを使いたいんだけど、そういうのはこれから研究けんきゅうかな。

そう考えながら何度かお湯を足し、弱火で炊いていくと、お米がふくらんできた。

あとは、獣人族さんの村で交換してもらったバターやチーズを入れていき、味見をしながら海水から作った塩を振って……出来たー！

「ふむ。チーズの香りがしてきたが、ピザではないのだな」

「これはリゾットっていう料理よ。チーズをたっぷり使っているから、是非食べてみて」

チーズが大好きなセマルグルさんが一番にやって来て、ピザではないことに驚いている。

ふふっ、そのうちチーズフォンデュやラクレットを作ってあげようかな。

「わあ！ お米とチーズの組み合わせって初めてだよー？ 楽しみー！」

「セシリア。いつもありがとう」

ユーリとヴォーロスもやってきたので、みんなで美味しく昼食をいただく。

午後は間取りを考えたり、さっき欲しいと思ったブイヨンを作ったりしようかなと思っていて、馬車がやってきた。

獣人族の人は、家の建築は明日からって言っていたけど、何かあったのだろうか。

「セシリア様。事前にお約束もなしに来てしまい、申し訳ありません」

「デュークさん！ えっと、まさかまた何かあったんですか？」

「ええ、ありました。これは由々ゆゆしき事態です」

馬車から降りて来たのは鬼人族の商人のデュークさんで、若い男性を二人連れて来ていた。

バステトさんの誤解による食料危機は解決したはずだし、獣人族の村だけでなく鬼人族の村とも果物の取引は定期的に行っているし……一体、何かあったのだろうか。

「セシリア様！ 獣人族の村へ行った際に、家を建てられるというお話を聞きました。我ら鬼人族は獣人族よりも筋力に長けておりますし、家も造れます。どうしてお声掛けいただけなかったのでしょうか」

「え？ 由々しき事態って……それ？」

「はい。例の食料問題を解決してくださったセシリア様は、我ら鬼人族の命の恩人です。どうかそ

の御恩をお返ししたく、こうして家作りに長けた者を連れて馳せ参じたのです」

かつてバステトさんが息子のマヘスくんのために食料を捧げるようお願いしていたせいで、獣人族の村の食料が枯渇しかけていた。

でも、それはマヘスくんが食べられないものだけを捧げていたからだってわかって、私が美味しいご飯を作って解決したのよね。

えーっと、みんな色々之恩に着すぎじゃないかな？ 獣人族さんたちの件も、鬼人族さんたちの件も、土魔法で生み出した食材で解決しているから、こちらが何か損した訳でもないし、あんまり気にしなくて良いのに。

「あの……家は獣人族さんたちにお願ひしたので、大丈夫ですよ？」

「お待ちください！ 獣人族の村の家をご覧になれましたか？ 彼らは木で家を造りますが、我らはレンガで家を造ります。どちらが優れた家かは一目瞭然です！」

一目瞭然なの？ 私は家電の知識はあっても、家とか建築に関する知識はないから、なんとも言えないのよね。

別に外見には拘らないから、過ごしやすい家であればそれで良いんだけどな。

「セシリア様。どうか、我らにもどんな家を建てたいか教えていただけないでしょうか。必ずご希望に沿った家を建ててみせますので」

うーん。獣人族さんは本職ではないって言っていたし、鬼人族さんにお願ひした方が良いのかな？

とりあえず、明日三者で話そうと伝え、要望を伝える。

素人の私が間に挟まるよりも、詳しい人たちが直接話した方が良いよね……と思って意見交換を提案した。

だけど翌日……もつと面倒なことになってしまう。

「木の柱の間に、土で壁を作るだつて!? 獣人族は一体何を言っているんだ!? 今から建てるのはセシリア様のご住居なんだぞ!？」

「だからだよ。木と土で作れば夏は涼しく、冬は暖かくなるんだ！ レンガで作った家なんて、家の中の空気が悪くなる!」

「ふっ。木は燃えるし、腐る。土の壁なんて、魔獣がぶつかって来たら一発で穴が空くぞ？ そんな危険な家にセシリア様を？ 馬鹿も休み休み言え!」

せっかく詳しい人達どうして話し合ってもらおうと思ったのに……家に使う材料の違いで大揉めしてしまうなんて……

しかも、問題はそれだけではなくて……

「ふむ。どちらでも良いが、窓を大きくするのじゃ。将来、我が息子マヘスが住むことになるかもしれぬのじゃ。いつでも日向ぼっこが出来るようにしておくのじゃ」

いつの間にか来ていたバステトさんが、家にいろいろと注文を付けている。ちなみに今は猫の姿でなく、人型だ。

デュークさんも、まさか鬼人族の守り神が隣にいて、私の家の話をしているとは思わないだろうなあ。

「はあ!? セシリア様のご住居だぞ!? 神殿のように厳かな雰囲気と、重厚さが必要だろうが!」

「何を言っている! セシリア様だからこそ、大地の優しさを感じられるように、家の中にも土の床を作るんだ!」

「日向ぼっこをするための場所はどうかのじゃ? そこは譲れぬのじゃ!」

……つて、気付けば大工さんたちがヒートアップしてるっ!? しかも、神殿のような雰囲気だなんて話が出ているけど、私はそんなの求めてないからね!?

「あの、すみません。普通の家で構わないんですが」

「はい。もちろん、セシリア様に相応しい神殿に致します」

「セシリア様の普通……やはり、神の木と呼ばれる聖木を探すところから……」

ほ、本当に普通で良いのっ! 神殿に住みたいとも思っていないし、聖木ってなんなの!? 木で

もレンガでも、どっちでも良いから、普通の家にしてよおおっ!

どうしたものかと考えていたら、セマルグルさんが話しかけてくる。

「ふむ。どうやら、家を建てる者たちの意見が纏まらぬようだな」

「そもそも、私の話を聞いてくれない気もするけどね」

「そうだ。ならば、その道の専門家に頼んでみるか」

セマルグルさんは、どうやら設計から手掛ける建築士みたいな人を知っているみたい。

というか、その種族自体が家を建てるプロというか、『家の精霊』と呼ばれているのだとか。

「お主たち。一旦、口論をやめるのだ」

セマルグルさんが対立している獣人族さんと鬼人族さんたちに声を掛ける。

「だから、荒壁に中塗りして仕上げて白土を塗れば、壁が呼吸して湿気を調整してくれるんだよ! アンタたちのレンガじゃ通気性が悪くて、カビが生えるのがオチだ!」

「カビだと? レンガ造りなら百年経ってもびくともしねえ! 土壁なんて雨が続けば崩れてくるくせに、余計な口出しをするなっ!」

あ、なんだか難しい話になっているけど、いずれにせよヒートアップし過ぎて、纏まらないわね。そう思っていると、セマルグルさんが怒鳴る。

「貴様ら! 黙らぬかあっ! これより、我らは家の精霊を呼んでくる! 言い争いでセシリアを

困らせるような貴様らには家など任せられん！ 今回の件は私の預かりとさせてもらおう！」

「は、はいっ！」

「か、畏まりましたあつ！」

セマルグルさんの一喝に、獣人さんや鬼人さんたちがその場に跪く。  
ようやく話を聞いてもらえた。

それに、この人たちも家の精霊のことは知っているみたいね。

とりあえず、家の精霊さんが来てから、改めて手伝ってもらおうという話をしたんだけど……いつの間にかバステさんが居ない？

キヨロキヨロと周囲を見渡していると、ヴォーロスが口を開く。

「あ、バステトなら、この人たちが口論し始めて、少しして帰ったよ」

「そうなんだ。それならまあいいか」

バステトさんも、埒が明かないと思つて帰ったのかな。

ひとまず今日のところは解散となり、私たちも家の精霊さんが居る場所へ向かう準備をする。

「ふむ。我に乗つて行けばすぐに着くのだぞ？」

「そうかもしれないけど、今回はそこまで急ぎじゃないし、ピクニックみたいにみんなで歩いて行つても良いかなーって思つて」

「わーい！ ピクニック、ピクニックー！ ……ところで、セシリアー。ピクニックって何ー？」

ピクニックが何かを教えてあげると、ユーリはウキウキと楽しそうにしだした。

それを微笑ましく見つつ、お弁当を作る。

「セマルグルさん。とりあえず、昼食を用意したんだけど、夕方には到着するかな？」

「そうだな。それほど遠い訳ではないし、ゆっくり歩いて行つても明るい内に到着するであろう」

いつもは西へ行くことが多いのだけど、家の精霊と呼ばれている種族がいるのは、ここから東らしい。

電車のレールも敷いていないし、みんな歩いて行くことにした。

「あ、セシリアー！ あの木を見てー！ 秋になると、あの木の実がすごく美味しくなるんだー！」

「そうなんだー。それは、収穫しないとね」

「うん！ ただ、ちょーつと硬いから、ユーリが殻を割つてあげるねー！」

ユーリが美味しいっていう硬い木の実だから……クルミかな？ だったら、クルミパンとか、クルミ餅とかにすると美味しそうね。

そうだ。もち米があれば、お餅も作れるようになる。もち米っていうくらいだから、普通のお米

と同じ栽培方法で良い……よね？ 家が完成したら、是非ともチャレンジしてみよう。

そう思いながら、時折ユーリたちとお喋りしながら歩いていると、見覚えのある場所にやってきた。

「ここは……この前、騎士さんたちと対峙した場所よね？」

「うむ、そうだな。あのバカ王子が我にちよつかいをかけてきた場所だが……また下らぬことを企てておらねば良いが」

「ま、まあかなり反省した様子で国へ帰っていったし、大丈夫じゃないかなあ？」

「わからぬぞ？ バカを治す薬はないと言うからな」

あ、この世界でもそういう言葉があるんだ。

日本にも古くから似た諺があるけど……いやいや、流石に大丈夫でしょ。……大丈夫だよね？

「うう。万が一、同じようなことがあったとしても、次こそ僕は絶対に寝過ごさないからね？」

「ゆ、ユーリも頑張つて起きるのー！」

「まあまあ。あんなことは滅多にあることではないから」

騎士さんたちを指揮していたルーファス王子によって夜襲を掛けられたんだけど、ヴォーロスとユーリが眠ってしまっていて、なかなか大変だったのよね。夜行性のバステさんとマヘス君のおかげで助かったけど。

ひとまず過ぎたことは忘れて更に東へ進むと、不自然に枝が折れている大きな木があった。

「なんだろう。枝を斧か何かで無理矢理叩き斬ったみたいね」

「ふむ……むっ!? セシリアよ。その木の先を見してみるのだ」

「下り坂で……海岸に繋がっている？」

「うむ。位置的に、ここからあのバカ王子たちが上陸したのだろう。その際、通るのに邪魔だからと、この枝を叩き折った……といったところか」

あー、ルーファス王子たちの仕業か。

土魔法で治してあげられたら良いんだけど、私が出来るのはあくまで植物の成長促進であって、治療は出来ないのよ。

この木の種や苗があれば、この大きさまで育てられるんだけど、全く同じにはならないし、そもそも別の木のよね。クローンとかではないから。

ルーファス王子に代わって木に謝って先へ進むと、小さな池があったので、そこで昼食を摂ることに。

手頃な大きさの石があったので、そこに腰掛け、バスケットに入れているお弁当を取り出す。

「今日のお昼はブリトーだよー！」

「ブリトー？ なんだか、いろんな具材が巻いてあるー！」



「そうそう。ユーリの言った通りで、小麦粉で作った薄い生地にお肉とかお野菜とかを巻いてるんだー」

本当はコーンフラワーから作るトルティーヤを使ったかったんだけど、トウモロコシを粉にする時間はなかったので、小麦粉で代用してみた。

具材はいろんなものを巻いてきたんだけど、ユーリは野菜がメインで、ヴォーロスはお肉。セマルグルさんはハムとチーズを巻いたものが気に入ったみたい。

それから、金属の筒に入れて持って来たブドウジュースに、セマルグルさんの魔法で氷を入れてもらい……うん。暫く休憩して、すっかり疲れが取れた！

さて、ピクニックの続きに出発よ！

\* \* \*

「な、なんだとっ!? 我が愚弟……ルーファスが既に、この闇ギルドへ依頼していただど!?」

「はい。アルバス第一王子とは違い、直接こちらへ足を運んでいただいた訳ではありませんが」

なんとということだ。ルーファスが土の聖女セシリアの奪還に失敗したので、俺様は闇ギルドの間をおおうと思っていたのに。

まさかルーファスが……というか、闇ギルドの者たちが依頼に失敗していたのか。

「そういう訳でして、ジャトランへの女性奪還については、当ギルドでは請けられないという話になっております」

「いくら金を積んでもか?」

「はい。ルーファス第二王子の依頼を受けた者は、ギルドでも古株のベテランです。奴が失敗した以上、当ギルドでは対応出来かねます」

ふむ。これはちゃんと情報を集めて整理しないとマズいかもしれないな。

闇ギルドへの依頼は断念し、実際にジャトランへ行った騎士たちから話を聞くことにしよう。

「訓練中に悪いな。邪魔するぞ」

俺様が騎士団の訓練所に行くと、近くにいた騎士が驚いた顔で声をかけてくる。

「あ、アルバス様っ!? 一体、どういった御用件でしょうか」

「うむ。ルーファスから依頼を受け、ジャトランへ行った者がいるだろう? 少し話を聞かせてほしくてな」

「お、お待ちください! あれはルーファス様から正式に依頼されたものであり、我ら騎士団としては……」

「何も罰を下そうとしている訳ではない。ただ、実際に現地へ行った者から話を聞きたいだけなのだ」

そういうことなら……と、若い騎士を数名紹介してもらった。

話を聞いていると、俄かには信じられない話が出てくる。

「セシリアがグリフォンとライトニング・ベアを使役していた？ ルーファスも同じことを言っていたが、本当なのか？」

「はい。その通りです。生きて帰れたことが奇跡だと思っています」

「……他には？ ルーファスは何の準備もせずに海を渡ったのか？」

「セシリア様が得意とする、防御魔法を無効化する腕輪を持って行っていました」

「魔法学校が作っている腕輪だな？ それを持って行っても、ダメだったのか!？」

「残念ながら」

なるほど。愚弟も無策で挑んだ訳ではないようだが……やはりセシリアが使役しているという神獣たちが強力過ぎるのか。

闇ギルドでも、騎士団でも敵わぬとなると、正攻法では無理だな。

俺様が開発中のア、レを稼働させられれば良いのだが、あれはまだ試作段階。

ならば、どうするか。

「……そうだな。ここは搦め手でいくか」

そうと決まれば、魔法学校へ行くとしよう。所詮奴らも闇ギルドと同じで、金を積めば動くらな。

ふっふっふ、土の聖女セシリアよ。俺様をルーファスと同じだと思っなよ。

## 第二章 家の精霊たち

お昼ご飯を食べた後、再び東に向かって歩いてみると、遠目に何か大きな物が見えてきた。

「セマルグルさん。もしかして、あれが目的地ですか？」

「おお、そうだ。あれは大きな壁で、あの中に街があるのだ」

「凄い……けど、あんなに大きな壁を作っているということは、この辺りに凶暴な魔物が出現するんですか？」

「いや。この辺りにそんなものは出沒せぬ。あれは、家の精霊たちの趣味というか、どれだけ大きな建築物が作れるか……と挑んだだけの話だと聞いておる」

実用性は皆無だけど、とりあえず作ってみたかったという、根っからの大工さんのね。

セマルグルさんの言葉で、このまま進んでも大丈夫なのだとなり、大きな壁に囲まれた街に向かって歩いて行く。

かなり巨大な壁だったみたいで、視界に入ってから結構な距離を歩いて、ようやく壁の近くに到着した。

だけど、何百メートルも大きな壁が真つすぐ続いているだけで、入り口がわからない。

「これは、何処から中に入るのかしら」

「セシリア。あつちに道が見えるから、そこから入れるんじゃないのかな？」

「ヴォーロス、ありがとう」

教えてもらった方角に向かうと、ヴォーロスの予想通り大きな門があつたので、ここから中へ入れるみたいだ。

「……って、誰も居ないのね」

「ふむ。おかしいな。ここにはいつも兵士が立つておつたのだが」

「そうなの？ ……セマルグルさんはこの街に入つたことがあるのよね？」

「もちろんだ……ああ、家の精霊という別名しか話していなかったな。この街はコボルトという獣人族の街なのだが……まあ大人たちを見た方が早いだろう。この街は我やヴォーロスも入れるから、共に行こう」

家の近くの獣人族さんたちの村では、村人を怯えさせるから……と、セマルグルさんやヴォーロスは村に入ってくれなくて、いつもユーリと二人で入つてた。

だけど、この街には入って良いらしい。

セマルグルさんたちが一緒に来てくれるのは心強いけど、どういふことなのだろうか。

そんなことを考えながら門をくぐり、街の中へ入り……その疑問がすぐに氷解した。

「わあ……可愛いっ！」

「せ、セシリアよ。こ奴らが可愛いのか？」

「え？ すごく可愛いでしょ？ だって、物凄くモフモフだよ？」

セマルグルさんの言つていたコボルトという種族は、一言で現すと、二足歩行で歩くワンちゃんだった。

リリーちゃんたちの獣人族さんや、バステトさんは人間に猫耳が生えているって感じだけど、コボルトさんたちは、犬そのものだから……うん。どっちも可愛いっ！

街の中を歩く小柄でモフモフなコボルトさんたちを見て、思わず走り寄ってしまふようになったけど……何かがおかしい。よく見たら、街の中を歩いているのは数人で、多くの人が地面に倒れている!?

「大丈夫ですかっ!？」

「……放つという」

「ええっ!? でも……」

「うるさいなあ。オイラたちのことは放つといてよっ!」

倒れているコボルトさんの一人に声を掛けたけど、邪険にされ、話も聞いてもらえなかった。一体、この街で何があつたのだろうかと考えていると、ユーリが声を掛けてくる。

「ねー、セシリアー。このコボルト……酔っぱらっているだけだと思ふよー。ほら、見てよー」

ユーリが指し示す方に目を向けると、先程のコボルトさんの足元に、いかにもお酒ですって感じのビンが転がっていた。

「ふむ……コボルトは勤勉な種族のはず。酒を飲んで酔い潰れるなど、聞いたことがないのだな」

「セシリア。街の中を見てきたけど、みんなお酒を飲んで酔っぱらっているみたいだね」

ヴォーロスが街の方から戻って来たけど、思い返してみると、さつき歩いていたコボルトさんも千鳥足だったように思える。

「けど、どうして街中に泥酔者が？」

初めて獣人族の村へ行った時は、村人たちが誤って毒キノコを食べてしまつて、みんな寝込んでいた。

しかし今回は、歩きながらお酒みたいなのを飲んでいるコボルトさんもいるし、自らお酒に溺れにいつているかのようだ。

「とりあえず、話を聞いてみましょうか」

「うーん。話が出来るような人が居るかなー? さつき僕が話を聞こうとしたら、熊が喋るなんてありえない……って言いながら、一人で笑っていたんだよ?」

あー、コボルトさんたちは人間よりも動物寄りだからか、セマルグルさんやヴォーロスを見ても驚かないけど、流石に喋るのは想定外みたいね。

「ぜ、全員が酔っぱらっている訳ではないと思うし、探せば話が出る人もいるはずよ」

「ふむ。それはセシリアの言う通りではあるが、酔っぱらいが多いのであれば、どのようなトラブルに巻き込まれるかもわからぬ。皆で揃って行動しよう」

セマルグルさんの提案で、みんなで固まつて街の中を歩いて行き、会話が出来るような人を探すことに。

「あの、ちょっと良いですか?」

「……酒なら、もう残ってないよ! あっちの食料品店に行くんだ」

「あの、私たちはお酒が欲しい訳ではなくてです」

「どうして、神様は俺たちを見放したんだー?」

えーっと、ごめんなさい。唐突過ぎて、ちよっと何を言っているか、わからないです。

気を取り直して別のコボルトさんに話を聞こうと試みたけど、かなりお酒を飲んでいいるからか、さっきの人と同じような感じで会話にならない。

そんなことを何回か繰り返したところで、呆れた様子のヴォーロスが口を開く。

「セシリア。これはもう、お酒を飲んでいいる人は諦めた方が良いんじゃないかな？」

「そうかもしれないわね。まずは酔っぱらっていない人を探しましょうか」

ヴォーロスの提案を受け入れ、街の中心にある広場から離れ、住宅街へ向かう。

中心の方では、お酒を売っているお店もあったし、離れてしまえばきっと大丈夫だと思ったのだけど……今度は歩いている人がいなくなってしまった。

「こうなったら……すみませーん」

近くにあった家の扉をノックして暫く待つと、コボルトさんが出てきてくれた。

「あの、少しお伺いしたいことがあるのですが……どうして、この街の人たちはみんな泥酔しているのでしょうか」

「……飲まなきゃやっつけられないからだよ」

「それは一体どういう……」

「悪いが、帰ってくれ。その話はしたくないんだ」

コボルトさんがそう言うと、バタンと扉を閉められてしまった。

さっきの人は酔っている感じはしなかったけど、町中に泥酔者がいいる理由は教えてくれない。

でも、一応会話は出来た！ という訳で、諦めずに次の家に行き、そのまた次の家へ。

そんなことをめげずに繰り返していると、五軒目で初めて女性のコボルトさんが出てきた。

「あ、あのっ！ 私はこの街へ来たばかりの旅人で、セシリアと言います。この街について少しだけお話を聞かせていただけませんか!？」

「え？ は、はあ。なんででしょうか」

「えっと、街中に泥酔しているコボルトさんたちがいいるんですけど、どうしてなのでしょう。コボルトさんたちは、真面目な種族だと聞いたのですが」

そう言うと、女性が悲しそうに顔を伏せる。

「そうですね。私も主人や兄が泥酔している姿なんて初めてみました。お酒を飲まない訳ではないのですが、せいぜい夕食時に少し嗜む程度だったのに」

「あの、みなさんが一斉に泥酔するなんて、何か訳があるんですよね？」

「はい。あの、街の中心に大きな広場があったのはご覧になりましたか？」

「ええ。とても広くて……けど、その広場で酔いつぶれているコボルトさんたちが大勢いました」

「その場所……本当は広場ではないんです。大きな木が何本も生えた、林なんです」



林っ!? 街の中心に!? だけど樹木どころか、切り株すらない綺麗な平地だったわよ!

「この街は大きな壁で囲まれていますよね? なので、植物を日光が当たる場所に集めようということ、この壁が出来た際に樹木を街の中心に移したんです」

「それが、何かマズいことに?」

「いえ。壁を作ったのも、樹木を移したのも、私が子供の頃の話です。もう二十年も何事もなかったのに、数日前に突然木が消えたのです」

「木が消えた!」

「そうなんです。枯れた訳でも、切り倒された訳でもなく、突然消えたんです。しかも、新たに木を植えても、翌日には消えてしまうんです」

木が消えるなんて、そんなことがあるのだろうか。

街の中には芝生や花壇があつて、草花は普通に生えていた。だけど、木だけが消えてしまうなんて。

「我々コボルトは、家の精霊と呼ばれる種族で、皆が大工であり、建築士です。ところが、このような事態になり、長老たちが話し合つた結果、大地の女神様から家を建てるな……と怒られているのだという結論に至つたのです」

「大地の女神様……が、家を建てるなつて言いますかね?」

「わかりません。ですが、木がなくなったことは事実ですし、我々は木を沢山切つて来たのも事実です」

女性によると、コボルトさんたちの男性は家を建てることに誇りを持っており、生き甲斐でもあるらしい。だけどそれが出来ない今は、完全に無気力で、自暴自棄になつてしまっているのだとか。

「あの、教えてくださり、ありがとうございます」

「いえ。こちらこそ、せっかく来ていただいたのに、街がこのような状態ですみません」  
女性にお礼を言い、ひとまず家から離れると、セマルグルさんたちに話を聞いてみる。

「セマルグルさん。大地の女神様つていう方が居るの?」

「うむ。正確な居場所までは知らぬが、モコシという女神がいるな」

「僕も話は聞いたことがあるよー! 会つたことはないけど……ただ、優しい女神様だつて聞いたんだけどね」

ヴォーロスもモコシという女神様は知っているらしい。

だけど、女神様が家を建てるなつて木を消したりするのかな?

大地を司る神様だし、木を大事にするのだろう。だから、木を切らないで……と言ってくるのであれば、まだわかる。

だけど、木を消すつて……その消されてしまった木はどうなるのだろうか。

切られても根っこが残っていれば、そこに接ぎ木をすることだって出来るけど、それすらないっていうのは、おかしい気がする。

「ねーねー、セシリアー。セシリアの魔法で木を生やしてみたらー？」

「そうね。ちょっと試してみましようか」

ユーリの提案で、街の中心にある広場へ。

あちらこちらでコボルトさんたちが倒れているけど、人気がないスペースを見つけ、具現化魔法を使ってリングゴの種を植える。続いて育成魔法を使い、その種を発芽させ……られない！

「うそ！ 育成魔法が……発動しているのに、植物が育たない！」

「ふむ。では、先程のコボルトが言っていた話は本当なのかもしれぬな」

「こんなことがあるなんて……」

セマルゲルさんの言葉を聞きながらも、半ば茫然としてしまう。

土魔法は今まで何度も使っていて、土の聖女という称号を得る程に得意としている魔法なので、流石にショックを受けている。

とはいえ、具現化魔法で種は作れたのだから、土魔法自体が使えなくなった訳ではないようだけれど。

「セシリア。他の植物を試してみたら？」

「そ、そうね。じゃあ、お花を咲かせてみようかな」

ヴォーロスに言われて我に返り、次はパンジーの種を作って植える。

そして育成魔法を使うと……発芽し、綺麗な花が咲いた。

「リングゴはダメだったけど、パンジーは大丈夫なのね」

「じゃあ、やっぱり木だけがダメなんだねー。でも、ユーリは木がないのは困るかなー」

ユーリはリスだから、普通は木の上で暮らすものね。

けど、どうして木だけがダメなのだろうか。

「そうだ。街の外で使ってみましようか」

壁の外に木は生えていたっけ？ この街の壁のインパクトが強すぎて、木が生えていたかどうか覚えていないなあ。

そう考えながら街の門を出て、周囲を見渡すと……見事に、一本も木が生えていない。

街から少し離れ、街の中と同じ様にリングゴとパンジーで試してみると、ここでもパンジーしか生えてこなかった。

「うーん。ここへ来るまで、木って生えていたっけ？」

「ユーリは見えないよー？」

「ふむ。少し待っておれ。上から見てみよう」

セマルグルさんが羽ばたき、真つすぐ上に登っていくと、周囲を見渡して戻ってきた。

「うーむ。この街の周りに木は生えておらぬな」

「じゃあ、街とかは関係なしに、広い範囲で木が消えているってこと？」

「そうなるな。とはいえ、離れた場所には普通に森があったし、この街を中心に木が消えている様に思えたな」

「ということとは……大地の女神様のモコシさんが怒っているのは、本当なのかな？」

「否定は出来ぬな」

どうしよう。私たちの家とか、そんなことは置いていて、大勢のコボルトさんが生き甲斐を失ってしまっている。

これを、どうにかしてあげられないだろうか。

そんなことを考えていると、陽が沈み始めていて、周囲が茜色に染まっていた。

「あ、とりあえず今日は休みましょうか」

「そうだな。しかし、コボルトたちがあの状態だ。元々治安が悪くはない場所ではあるが、街の中には泊まらぬ方が良いのではないか？」

「僕も街に泊まるのはやめておいた方が良いと思う。見たところ、コボルト以外の種族は街に居なさそうだったし、酔っぱらいに変な難癖をつけられるのも嫌だしね」

普通に考えたら、セマルグルさんやヴォーロスに難癖をつける人なんて居ないでしょうけど、酔っぱらいは訳がわからないことをするからね。

私も日本でお酒の席に出ないといけない機会が何度かあったけど、酒癖の悪い先輩が上司に絡んで大変なことになったのを目撃したし。

……うん。巻き込まれたくはないなあ。

「じゃあ、この辺りに家を作りましょうか」

土魔法を使って木を生やせはしないけれど、具現化魔法で石や鉄を出せるので、凄く大きなレンガ……みたいなのを幾つか作り出してみた。

というのも、拠点にある家は大きな石板を支柱に立て掛けただけの簡単な造りだ。でも、大工さんたちから様々な話が聞けたし、コボルトさんたちの街でいろんな家を見たので、挑戦してみたんだけど……うん。難しい！

同じ大きさの石を出しているはずなのに、何故か隙間が出来ていて……やっぱり、本職の人たちにお願しないとダメね。

ただ、セマルグルさんが入っても大丈夫なくらいに、広い家にはなったけど。

「セシリア、凄ーい！ 大きな家だねー！」

「でしょー？ これなら窮屈にならないと思うし、セマルグルさんもたまには皆と一緒に寝よう

よー！」

ユーリが嬉しそうにピョンピョン跳ねているけど、私も内心は飛び跳ねている。いつもヴォーロスの背中の上で眠ってモフモフを堪能たんのうさせてもらっているけど、セマルグルさんのモフモフは抱きつかせてくれないのよね。

拠点にある家が狭くてセマルグルさんが入れないっていう事情もあったけどさ。だけどこれなら、セマルグルさんのモフモフを思う存分堪能出来るはずよっ！  
そう思っていたんだけど……

「あー……セシリアよ。気持ちは嬉しいのだが、我は入れぬぞ？」

「ええっ!? どうして!? 中は十分広いよ？」

「うむ。中は広いが、入り口が狭すぎるのだ」

あ……しまった！ ドアなんて作れないから、出入り口は拠点と同じように石の板を作り出して塞ぐつもりで……っ、作り直さなきゃっ！

「ちょ、ちょっとだけ待って！ 今すぐ入り口を……」

「いや、それよりも食事にせぬか？ 我はチーズが食べたいのだが」

セマルグルさんに言われて気付いたけど、家を作っている間に、陽が完全に沈みかけていた。

「そうね。夕食……って、待って！ コボルトさんの街に泊まると思っていたから、昼食しか用意

していないのよ。急いで何か交換してもらってくるわね」

獣人族さんも鬼人族さんも、貨幣かへいは使っておらず、基本的に物々交換ぶつごうかんだ。

なので、辺りにトマトを生やして急成長させ、ヴォーロスやユーリにも手伝ってもらって収穫する。

木は植えられないけど、トマトは植えられた。ちゃんと木の類たぐいではないと判定されたみたい。

ヴォーロスとユーリについて来てもらって、街の中にあるさつき街の人が言っていた食料品店へ行くと、パンやチーズに、ハムやお水と交換してもらえた。

流石に拠点に作ったオーブンをここで再現するのは大変だけど、具現化魔法でコイルを作ったヴォーロスに弱めの雷を流してもらえば、簡易かんい的なコンロが出来上がる。

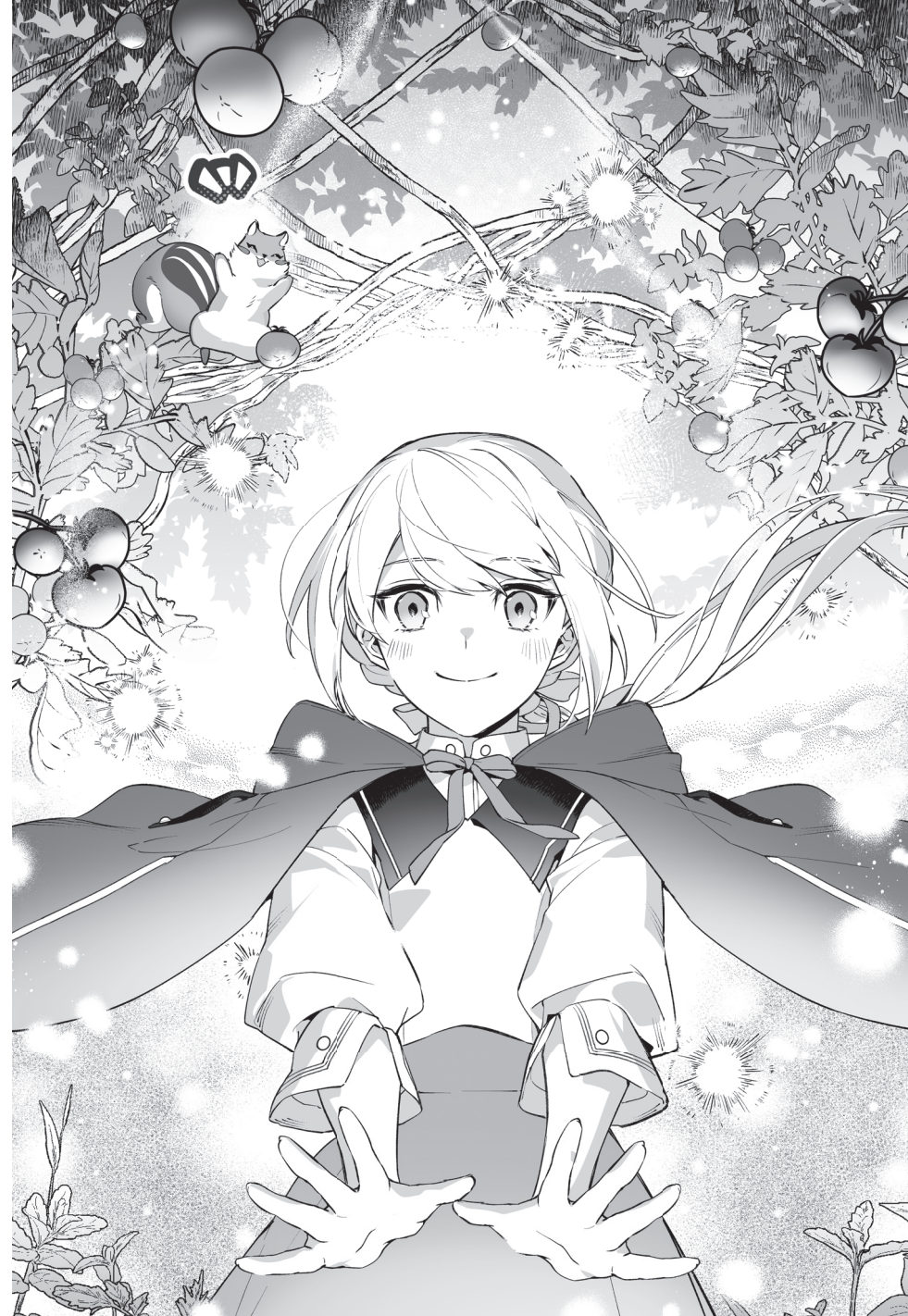
なので、同じく具現化魔法でホットサンドメーカーを作り、パンにチーズやハムを挟んで温めると……出来たっ！

「お待たせー！ ご飯が出来たよー！」

木が生やせないだけで、葉物野菜はものは普通に作れるので、レタスやキャベツにルッコラなど、野菜たっぷりのサラダも一緒に出して……セマルグルさんはちゃんと野菜も食べようね？

セマルグルさんがサラダを見て、ちよっと苦々くさしい表情を浮かべていたけど、みんな完食したので就寝することに。





「お風呂……とまでは言わないけど、水浴びはしたかったなあ。流石に飲み水で水浴びする訳にも  
いかないし」

「ふむ。先程、ヴォーロスが雷魔法を流していた金属を使えば、水は出せるぞ？」  
「えっと、どうやって……あ、そうか！ 氷魔法！」

「その通りだ。我は水は出せぬが、水は出せるからな」  
あんまり大きすぎても大変なので、ちょっと大きめの桶……くらいの箱を作ると、セマルグルさ  
んがそこに氷の塊を出してくれた。

簡易コンロとして使っていたコイルで氷を解かすと、ちょっと冷たいけど、水が出来た。

セマルグルさん曰く、一応飲むことも出来るらしいけど、美味しくはないのであまりオススメし  
ないらしい。

だけど身体を拭くには十分なので、布を浸して身体を拭いた。  
サッパリしたところで、寝ることに。

ただ、せっかく作った石の家だけど、セマルグルさんは入れないし、私とユーリはヴォーロスの  
上で寝るので、半分以上使っていない。家を建ててもらう時には、今回の失敗をしつかり伝えて、  
ちゃんと活かしてもらわないとね。

……いやまあ、私と違って専門にやっている人たちなら、こんなミスはしないのかもしれない



けど。

翌朝。夜間に何事もなく、ぐっすり休めたので、しっかり朝食を食べて大地の女神のモコシさんの所へ行ってみることに。

「ひとまず、どうして木が生えないようにしたのか、理由を聞かないとね」

「そうだね。聞いた話では、理不尽なことをしてくる女神ではないと思う。何かしら、理由があるはずだから、それを解消してあげれば良いんじゃないかな」

「なるほど。じゃあ、ヴォーロスの言う通り、まずは話を聞いてみよう……って、よく考えたらモコシさんって、何処に居るの？」

昨日作った仮の家や、簡易コンロなどを消して、出発出来る状態になったけど、どっちへ行けばよいのかわからず、足が止まる。

「僕は何処に住んでいるかは聞いたことがないな」

「我も知らぬな。大地の女神というくらいだから、空にはいないと思うが」

「ユーリも聞いたことがないかな」

うーん。出発しようとして、わずか十秒で行き詰まってしまった。

モコシさんって、一体誰が知っているのだろう。

「……あつ！　そもそも、大地の女神が怒っているって言ったのは、コボルトさんたちの長老さんって話だったよね？」

「なるほど。その長老なら、モコシを知っているはずだね」

「そういうことっ！　早速コボルトさんたちの街へ行行って聞いてみましょう」

——という訳で、再びコボルトさんたちの街へ。

ただ、何処に長老さんが居るのかわからないので、街に居る人たちに聞いてみるんだけど……まともな答えが返って来ない！

何人もの酔っぱらっているコボルトさんたちと話し、埒が明かかないと思っていたら……業を煮やしたセマルグルさんが、泥酔しているコボルトさんに向けて何かの魔法を使用した！

「ふん……」

セマルグルさんが放った白い光が、酔い潰れているコボルトの男性を包み込んだと思ったら……突然起き上がった！

「えっ!?　セマルグルさん!?　今のはなんですか!？」

セマルグルさんの返答を聞く前に、コボルトの男性が声を上げる。

「……えっ!?　あれっ!?　僕は一体……」

「お主。コボルト族の長老が何処にいるのか教えるのだ」

「うえっ!? グ、グリフォン!? どうしてこんなところに!？」

いやあの、昨日も普通に街の中を歩いていたし、この人だって少し前まで普通に……いや、泥酔していたから普通ではなかったけど、セマルグルさんと話していたんだけどね。

それにしても、セマルグルさんは一体どんな魔法を使用したのだろうか。

「で、長老は？」

「は、はいっ！ その通りを真っすぐ行つて、三つ目の角を右に曲がったところに、役場がありますので、そこに居るか」と

「うむ。礼を言う」

セマルグルさんのおかげで、あつという間に長老さんの居場所がわかってしまった。

啞然<sup>おげん</sup>としているコボルトさんを他所<sup>よそ</sup>に、教えてもらった方向へセマルグルさんが歩いて行くので、慌てて行く。

「セマルグルさん。さつきは何の魔法を使つたんですか？」

「ああ、あれは治癒<sup>ちゆ</sup>魔法だ。泥酔も状態異常の一種だからな。泥酔という状態異常を解除させたのだ」

セマルグルさんの治癒魔法は、怪我<sup>けが</sup>や火傷<sup>やけど</sup>を治すだけではなくて、そんな使い方も出来るんだ。

日本で使えたら、それだけで商売が出来そう……って、そんなことを考えている場合ではなかったわね。

教えてもらった通りに進んで行くと、周囲よりも二回りくらい大きな建物が見えた。

おそらくこれが役場なのだろうが、流石にセマルグルさんは入れそうにない。ヴォーロスならギリギリ入れそうだけど、通路などは狭そうな感じがする。

なので、私とユーリだけで中へ入ったのだけど、人が……居ない？

「あ、いらっしやいませ！ すみません。今、諸事情で職員の大半が休んでしまっておりまして、ちよーつとばかり人手不足なんです」

誰も居ない受付で困っていると、コボルトの女性が走ってきた。

「た、大変そうですね」

「その……はい。私、本当はただの受付なんです。それなのに、休んでいる職員に代わって補助金の申請対応をしたり、不在の管理職の代わりに私がサインしたり、備品の補充をしたり、相続の相談に乗ったり……あははは、無理！ もう無理いっ！ 蒸留酒<sup>じようりゅうしゅ</sup>の酒税が減税される樽<sup>たる</sup>の大きなえーつと、どうやらこのコボルトの街の騒ぎのせいで、受付の女性が大変なことになっていると

いのだけは良くわかった。

まだ午前中なのに、ちよつと目が怖いというか、もう限界を超えている感じがする。

「それで、お客様はどのような御用件で？」

「あ、えっと、長老さんにお会いしたいなーって思いまして」

「長老に!? アポは……」

「す、すみません。取っていません」

「では、残念ながら面会は無理です。今は、建築ギルドに鍛冶師ギルド、錬金ギルドや薬師ギルドなど、木材についての陳情を聞く予定が詰まっています、今から約束を取り付けるならば、最短で二十日後ですかね」

二十日っ!? 私たちはモコシさんに話を聞きに行きたいんだけど、街がずっとこの状態というのはどうかなあ。

「えっと、私は大地の女神モコシさんに話を聞きに行きたくて……」

「ん? それなら、別に長老の許可は要らないですよ? 特に制限はありませんので」

「え? もしかして、モコシさんが何処に居るかご存知なのですか?」

「ええ。流石に忙し過ぎて案内は出来ませんが……あ、お客様が受付をしてくださるなら、私が代わりに女神様の所へ行つてきますよ? 何をするか知りませんが」

えーっと、忙し過ぎるからか、メチャクチャなことを言っている気がするけど、大丈夫かな?

「すみませーん。さっきの酒税の件なんですが……」

「ひいっ! しよ、少々お待ちくださいああいつ!」

「あっ! 待つてください! モコシさんの居場所だけ教えてください!」

よく見たら、役場の中にある幾つものカウンターの前で、大勢の人が待っている。

私の後ろに誰も並んでいないから、てっきり捌き終わっているのだと思っていたけど、そうじゃなくて現実逃避で私のところへ来ていたんだ。

「お客様。女神様のところには、こんな感じで行きます」

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ。簡単な御用件で助かりました。ところで、税金について詳しくないですか?」

日本の法律でさえ大した知識もないのに、コボルトの街の税金なんてわかる訳もなく、役に立たないと謝っていた。

いや、謝る必要もないんだけど、なんだか凄く大変そうで……ううん。あの女性のためにも、早くなんとかしてあげないと。

おそろく地図だと思うけど、折りたたまれた紙をもらったので、役場を出てセマルグルさんたちと一緒にしてみる。